

事業所訪問

株式会社 習志野トランスセンター 第1巻

今年の夏は、天候に恵まれなかったわりには台風が少ないと報じられていた矢先、日本の一部の地域では低気圧と、遅れてやって来た台風の影響で大被害が発生し、大きな禍根を残していきました。また、全国各地で毒物などによる悪質な事件が相次いだり、殺傷事件などがテレビをにぎわせたり、政治・経済を含めてもあまりいいニュースが飛び込んでこない今日このごろですが、読者の皆さんは、きつとよい思い出に満ちた夏をお過ごしになられたことでしょうか。

四方を主要幹線に囲まれ 物流の最適地に位置

さて、今回で三一回目を数えることとなった事業所訪問先は、わが健康な敏感な消費者の立場に立った仕事をしたいということが必要ということだそうです。

増田社長は、別の企業も経営されておられるわけですが、ここでは国際基準となるISOの取得を目指し、社員の資質の向上を含めた会社のステイタスを確たるものにしようと努力されておられます。

このように、これからの物流は、社会的地位の確立とともに、いわゆる一括物流・総合物流の時代で、物資の運搬だけでなくそこに付加サービスの提供が必要とされているのだそうです。なかなか一朝一夕にはいかない景気の回復ですが、地域の近



初代社長 飯生氏の銅像

保の事務局のある習志野トラックステーションの隣にあり、習志野市の西端の茜浜に所在して顔見知りの「お隣さん」でありながらなかなかお邪魔することができなかった株式会社習志野トラックセンターで、今回快く取材を受けてくださいました。朝夕はもう秋風を肌で感じるようになった九月八日のことです。

国道、東関東湾岸線、京葉道路、第二湾岸等、四方を主要幹線道路に囲まれ、どちら方面からも物流には最適の場所に位置しています。

事務所を出て、歩くこと一分、私たちの事務所と地続きの同社は、広大な敷地の中に近代的な本社屋が建っており、初代社長の銅像とともに社の立派な象徴となっていました。各所に観葉植物などが置かれた玄関に入り、私たちが「こんにちは、健

代的運送業のモデルを目指し、中小企業にしかできないフットワークのよさを生かし、社会に貢献することを経営理念に掲げた同社は、きつと手本となる礎を築いてくださるものと私たちは確信しました。

社長自ら朝夕水を飲むなど 「一七の健康法」を實踐中

次に話題は、社史に移行しました。株式会社習志野トラックセンターの発足は、昭和四十七年にさかのぼります。当時の習志野市議会議長であった飯生氏（初代社長）のよびかけで近隣地区の運送業者が前述した経営理念のとおり優良モデル企業を設立しようと集結したのがきっかけとのこと。その後、昭和五十二年に「裸のつきあい」をモットーとされた九社の共同出資法人として設立許可を受け、昨年、設立二〇周年を迎えられました（おめでとうございまして）。

設立当時この茜浜地区は、海の埋立地の原野であり、習志野トラックセンターは埋立地進出企業第一号だそうで、その後徐々に企業の進出があり、地域の成長とともに同社も業績を伸ばされてこられたようです。



増田社長(左)と和田部長

保組合です！」と挨拶すると女性職員の方が笑顔で出迎えてくださり、今回の企画を中心となって引き受けてくださった和田総務部長に奥から「どうぞこちらへ」と声をかけられ、応接室にお邪魔しました。まもなくして、同社の増田社長が同席され、取材が始まりました（当組合の健康管理事業等推進委員でいらつしやる川原田部長が所用で同席いただけなかったのが残念でしたが…）。

経営戦略は「原点に戻る」と

恒例のごとく、事務局から健保の現状をご説明するところから始まっ

代表者が初代飯生氏、二代目安原氏そして現在の増田氏へと見事にパトナッチが行われてきた経過をみると、歴代諸氏のご苦労され築いた地盤を、引き継がれた方々がさらに広げて邁進されておられるのが同社の特徴のように感じました。

一社の力より九社が団結して、しかも先見の明をもって常に新しい分野にアンテナを広げながらの事業展開はきつと無限大の力を生み出すことだと改めてこの会社組織の設立の意義を感しました。

最近では、九社のいわゆる二代目の交流会を頻繁に開催され、勉強会を通じて後継者づくりに力を注がれておられるとのこと。現状維持では、企業の発展は難しいといっても過言ではないと思いますが、同社のように、新しい風をうまく取り入れる環境づくりがこれからは大切ではないのでしょうか。きつと、習志野トラックセンターは物流の新しい旋風を巻き起こしてくれるものと私たちは期待を寄せたところです。

その後、ご自身の健康管理を増田社長にお聞きすると、朝夕に一杯の水を飲むことなど「一七の健康法」があり、それを実践されておられるのだそうですが、エネルギーシユな

たのですが、増田社長は、少子高齢化のことや健保財政を圧迫している拠出金制度、さらにはこれから始まるうとしている介護保険などについて深く興味を示して質問を何度もされ、こと細かにメモをとられていた姿が印象的でした。

最初の話題は、やはり景気についてでした。長引く不況のなか、各企業とも四苦八苦しながら利潤を追求されていますが、同社においても「運賃の値下げが、かつては考えられなかった幅で行われるのが当たり前のようになった」と和田部長が話されたように、取引先からの値下げの幅が、数パーセントではなく一桁違ったレベルで行われるようでした。

こうしたなかで、いかに競争に勝ち企業存続をかけて経営戦略を練るかということになるわけですが、それは、「原点に戻ること」と増田社長は力強くおっしゃいました。

全国の運送業者中、約一割だけが利益を上げているといわれているようですが、今のうちに不況下でも、ものがある時代には何が必要とされているのか改めて見直し、時代に即したアイデアを駆使して再スタートをすること、経済にいちば



物流の新しい旋風を巻き起こすか、期待されている

氏の言動には何事も全力で取り組む姿勢がひしと感じ取られました。こうして、あつという間に予定されていた時間が過ぎてしまい取材を終えました。

皆さん、ご協力ありがとうございました。

☆ ☆ ☆

本誌がお手元に届くころには、秋たけなわでしょうか。

味覚に、運動に、レジャーにと、深まる秋をご堪能ください。